いしかり潛

自由民権運動・秩父事件指導者
—井上伝蔵、石狩の二十三年— ……中嶋　幸三—1

石狩浜のコダマカイ ……吉岡　玉吉—13

石狩浜の蜆貝とその模様 ……吉岡　玉吉—17

石狩浜の漁業—小手操網漁業 ……吉岡　玉吉
補訂　田中　實—22

第 16 号

石狩市郷土研究会

211.5

自由民権運動・秩父事件指導者
―井上伝蔵、石狩の二十三年

中嶋　幸三

こんにちは。失礼します。座ったまま、資料を見ながらやります。

私は、二年前まで数学の教師をやってました。歴史家でも何でもないんですね。加藤楸邨（しゅうそん）先生が東京で開いた「寒雷」（かんらい）という俳句の会の同人になりまして、俳句をやってるわけなんです。今日はですね、伝蔵というのはどういう人間か、という話から入ろうと考えてます。

伝蔵という人は、事件後に逃亡したものですから、裁判の尋問調書がないんですが、警察の手配書というのがあるんですね。そこにこういうふうに書いてあるんです。

一　年齢三十二、三
一　丈高キ方（背が高い）
一　顔長ク白キ方（顔が長くて白い）
一　歯並揃ヒタル方（歯並びがそろってる）
一　鼻高キ方
一　男振ハ美ナル方

六項目あるんですけど、欠点が全然ないんですね。男振りはよくて、背が高くて、歯並びがよくて、顔が白くて、鼻が高いというんです。手配書を書いてた警察官は「いい男だなぁ」ってつぶやいたでしょうね。確かに三十代の写真を見ますと、なかなか役者みたいなんですよね。

『自由党史』というのがあって、岩波文庫から上・中・下が出てます。その下巻に伝蔵のことが書かれているんですね。

為人沈毅剛胆（ひととなりちんきごうたん）、而かも容貌婦人の如く、挙止極めて嫻雅なり。

というんです。婦人のようだっていうんですけど、皆さんはだれを思い浮かべますか。私はすぐ、玉三郎を思い浮かべたんですよ。どこかから声が掛かるんじゃないですか。「玉三郎」とか何とかいって。いい男ですよね。

それで、嫁さんがなかなか選べなかったんですね。商用で東京に行ってたものですから、三十歳まで独身だったんです。浅草の芸者さんで、侍の娘だった古ま（こま）さんという方と結婚するんですよね。きれいかどうかは、写真がないのでわからないんだけども。後年の佐藤セツという伝蔵の娘の話だと、気立てのいい女性だったらしいですよ。まあ、似合いの夫婦だったんじゃないでしょうか。

そういうことで、伝蔵という人はなかなかの人物だったんですね。「容貌婦人の如く」だけど「沈毅剛胆」というんですから。

秩父事件のクライマックスが十一月三日だったんですが、現在の秩父市を占拠するんです。郡役所の役人、警官が全部逃亡しちゃって、そこへ数千名の困民軍が入ったんです。現在も続いてるんですが「矢尾商店」という大きな商店があったんですね。そこの番頭で、矢尾利兵衛さんという人が日記を書いてまして、困民軍の農民が商

店に一万を貸してくれ」というふうに言ったんですね。そうしましたら「幹事らしき人品よき者」が来て農民を諭すんです。「本部から領収証を出してちゃんと借りるから、ちょっと待ってろ」と。「人品よき者」の頭注に「井上伝蔵なり」って書いてあるんですよ。数千の農民が突入していった町です。ごった返しているわけでしょう。叫び声とかいろいろなものがあって。郡役所の書類が散らばり……。

ここに、北海道新聞社から現在本屋に出ている『北へ…異色人物伝』という本があるんです。ここに埼玉の人が二人入ってるんです。一人はもちろん井上伝蔵ですね。もう一人は荻野吟子という女医第一号なんです。この人は埼玉の妻沼（めぬま）の出身で、伝蔵より三つ上ですから同時代の人なんですね。北海道へ来たということで、くしくも伝蔵と同世代の女性がこの本に入ってるんです。いい本ですね。北海道新聞にはお世話になりましたので、宣伝をします。こういう本ですね。

荻野吟子さんという人と伝蔵とは、実はかかわりがあるんですよ。どこでかといいますと、荻野吟子の先生が松本万年という学者なんですね。東京の高等師範の教授をやりましたが、その人が秩父市の出身なんですね。娘さんが荻江といって、東京女子師範に荻野吟子と一緒に入ったんです。優秀な方なので学校で「残れ」と言われて教授になりまして。で、その荻江さんが九段坂に「止敬塾（しけいじゅく）」という女塾を開いたんです。女学の塾ですね。そこへ明治十四年、井上伝蔵の姪の井上直が十五歳で入学したんです。井上直は明治女学校へ入るんですが、そこの衛生学の先生を吟子がやったんです。そこで直さんも教わるんですね。そういうことで、つながっちゃうんですよ。両者が同時代に北海道の大地に立ってたんですね。そういうふうにつながりがあるものですね。

伝蔵の青年期というのは激動の時代ですね。ちょっと調べてみますと、明治五～六年の時代からまず啓蒙思想というのがあって、明治六年にできたので「明六社」というのがありました。森有礼（ありのり）が始めまして、福沢諭吉だとか三十人ほどの学者が結集をして作って、明治七年に入って『明六雑誌』を出すわけですね。今、この『明六雑誌』は、岩波文庫から下巻はまだですけど、上巻が出てますよね。したがって、今日でも読めます。「明六社」の一人である西村茂樹さんという医師が、こんなことを言ってますよ。

「戦士に適する者をすべて賊という見方というのは人糞独裁国の風習である」

退けなければならないと。賊に適する者が全部敵ではないですよと言ったんです。そしたら、森有礼さんは『妻妾論（さいしょうろん）』という論文で、

「女子をもって男子の遊具となすというのは、外国の我が国を目して地球上の一大淫乱国と言われてもしょうがないだろう」

と言ったんです。女子を解放しろという論ですね。

それから中村正直（まさなお）がですね、「善良ナル母ヲ造ル説」にて、女子教育というのは非常に重要であるということを言った。

福沢諭吉は『西洋事情』というのを書いてますね。これは今、文庫本に出てません。岩波の『福沢諭吉選集第1巻』に入ってますけ

どね。独立宣言をこんなふうに訳してます。

「天ノ人ヲショウズルハオクチョウミナドウイツセツニテ」

「オール　メン　アー　クリアイティブ　イコール」を訳したんですね。それを『学問のすゝめ』の方で

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり」

とかみ砕いたんですよね。

こんなふうに啓蒙思想というのは「人間平等」という思想を説いたんですよね。それが全国に広まっていったんです。当時の青年というのは、福沢諭吉の本を皆すごく読んで、今日でいうベストセラーだったんです。海賊版が出たというんだからすごいですよね。

この青年たちが学んで、実践哲学に変えていきます。それが「自由民権思想」として発展をしていったんですね。特に明治七年（一八七四年）に、板垣退助・江藤新平などの八名が『民選議員設立建白書』というのを出しました。これから自由民権という運動が始まるんです。伝蔵はちょうど二十代、学問の意欲に燃えていた頃ですね。

で、明治十二年に「国会は開設をせよ」という署名運動が始まるんですね。この時に群馬県の高崎に「有信社」という政治結社ができて、宮部襄（のぼる）という、伝蔵と非常に仲のいい人が署名運動を始めて、群馬県下で一万六千名の署名をやったんですね。全国で二十四万ですから。それはもう、署名運動のはしりになるわけです。

井上伝蔵と同じ秩父の下吉田村に、田中千弥という神官がいるんですよね。その人の『田中千弥日記』という、こんな薄い本が出てるんだけども。幕末から明治三十年代にかけて毎日日記を書いてまして、すごいんですよね。メモ魔です、メモ魔。もう、ものすごい日記です。その人が明治十四年の正月に俳句を作ってます。どんな句かといいますと「自由権利」という題があるんですよ。

天井に物もつかへずくにの春

前書きが「自由権利」というんです。「天井に物もつかへず」というのは「天井抜け」ということなんです。「底抜け」の反対です。「取り止めもないハメをはずす」ということなんですね。村人が「自由」だとか「権利」という言葉を盛んに言っていると。彼は神官ですので「敬神尊王思想」です。「自由権利」というのが苦々しかったんですね。それで、この句を詠んでます。

その翌年、明治十五年の正月に、伝蔵は短歌を作ったんですよ。

濁なき御代に者阿れど今年より八年之後はいとゞ寿むべし

もっともっと澄むだろうというね。「八年之後」というのは、明治二十三年の国会開設の詔勅を言ってます。明治十四年十月十二日に、明治二十三年を期して国会を開設をするという詔勅が出ました。それを伝蔵はとらえて「国会が開設をされたならば、人民の意思が反映をされて、ますます澄んだ国になるだろう」というふうに書いてありますね。

そうすると、その千弥という人の俳句と伝蔵の短歌、思想的に全く逆なんですね。こういうことから秩父の山村の中に、国権の思想と民権の思想の激しい戦いがあるんです。これが俳句と短歌から見えてくるんですね。

現在、秩父事件は「自由民権運動とあまりかかわらないんじゃないか」という見解もあります。学者の先生方の中にもいるのだそうですけど、私が「自由民権運動とかかわりのない証拠は、では何ですか」と先生に聞いたとすると、証拠というのはおそらくないですよ。私はあるんですね。俳句と短歌があるんです。こういう俳句というのは短い詩ですけど、ちゃんと物を言ってくれるんですね。そういうことで、伝蔵は明治十四年から十五年、村内で自由民権思想を持って戦ってたわけですね。

ところがその明治十四年というのは「十四年の政変」といいまして、大隈重信が参議を追われますよね。政府の方が「主権在君の天皇制憲法」というのを考えていたのに対して、大隈重信という人は「直ちに政党中心の立憲政治をやれ」というふうに、ひとり言ってたんですね。それが邪魔だったんですね。参議を追われまして、大蔵卿をやってましたから、それが松方正義に代わります。で、松方デフレというのが来るわけですね。

松方デフレというのは、一言で言うのは難しいんです。簡単に言ってしまうと「政府の出費を少なくして増税する」ということですよね。それで清国に対する軍備を増強するということです。確かにそれが効果が現れるのが明治十六年からですよね。秩父地方の生糸の値段です。生糸というのは輸出の第一位を占めていたので、政府が生糸を奨励してたんですね。で、秩父の農民たちは桑畑をどんどん増やしてたんです。畑をつぶして桑畑にしてきたんですね。そして養蚕をする蚕室という小屋を作るんです。それから糸を紡ぐ座繰（ざぐり）というのをやめて、ちょっと新しい物を入れたりする、かなりの設備投資をやったんですよ。それを明治十三年から十四年の創世期の時代にそれをやりました。生糸一斤が、どんどんどん上がっていく。明治十一年が四円六十銭、明治十二年が五円七十三銭、十三年が六円九十一銭、十四年が七円九十二銭、十五年、六円六十六銭。

ところがデフレ政策が功を奏したころ、明治十六年、一気に三円八十二銭に下落するんですね。明治十四年のちょうど半値です。ところが、埼玉県の税収は増えてるんですよ。埼玉県の税収、明治十三年の地方税は三十九万三千五百十五円です。明治十七年の農民が非常に苦しんでいた時代には、五十六万三千六百七十五円に増えました。すなわち十七万円も増えたんです。これは農民にとっては、生産物価が半値になり、税金は変わらないんです。税制は明治六年から十八年間こうなってます。「土地の豊凶（豊作凶作）によりて増減せず」というんです。税というのは全然変わらなかったんです。

生産者物価が半分に下落して、税金を同じに払っていたということは、結果として農民は、明治十三～十四年から比べると、二倍の重税だったわけですよね。ここで秩父では倒産が起こるんです。高利貸しが暴徒しまして、田中千弥のメモ魔さんが書いてるところによりますと「一年足らずで元利合計は元金の三・三倍」というんですよ。百円借りるとするでしょ。一年後には三百三十円になる。当然倒産しますよね。それで税金がどんどん、どんどん来ます。

『木工堂日記』というのがあるんです。『田中千弥日記』とは別な

のがね。農民が書いてます。明治十六年十月二十三日。「池原という耕地」集落を秩父では耕地というんですね。「十九軒の内十五軒身代限（しんだいかぎり）」。破産してます。十九軒のうち十五軒、集落一個消えちゃってます。十一月十三日「あまりの金図版にて、うち込み追いはぎあり」。暴動なんか起こってます。明治十七年正月「諸税取り立て」。ここで税金がどんどん来るわけです。「諸税」。道路税、地方税、村費、学校税等々ですね。そして一月二十五日にはこんなふうに書かれてます。大宮というのは現在の秩父市のことです。「大宮役所下身代限七百余戸」。大きな農家の七百戸以上が、破産したと書いてある。七百戸というのはすごいですね。そのうちの一軒に私の家があるんですよ。

中嶋家というのは、初代が久衛門（きゅうえもん）というんです。天正元年（一五七三年）二月に北条家の家臣、高橋肥前守の長女、紅葉（こうよう）さんをお嫁さんに迎えて、篠塚という家から独立して中嶋になりました。久衛門という人は、寛永十三年十二月十六日八十三歳で没しております。妻の紅葉は、年号が分かりませんけど、五月九日七十四歳で没。これがうちの初代ですね。

こんなのは秩父では古い方ではないんです。その家が、工場がつぶれたり大飢饉があったり、いろいろ戦乱があったが、ともかく明治十七年（一八八四年）までの三百十一年間続いてきたんです。秩父の古い農家が、何とかして三百年間続いてきたんです。切り抜けてきたわけですよ。村人と共同して、支えあって続いてきた。

ところが明治十七年（一八八四年）の八月頃、一遍に消えてるんです。これはもう未曾有のことですね。歴史上そんなことなかったんですから。明治十七年というのがいかにすごい時代だったか。こういうふうになだらかに続いてきた大地が、断がいになってバーンと落ちたみたいな時代ですよね。秩父事件というのは、ここの断がいから噴流する地下水ですね。必然的に起こったんです。

彼らは「付和随行」じゃないんですよ。一万人といわれるんだけれど。「付和」というのは「わけも分からず」。「付和雷同」の「付和」です。「随行」というのは「従っていった」。というふうに役人の側の大多数は言うのだけれど、決して「付和随行」ではない。

うちの祖父の太次郎というのは、秩父事件に竹やりを持って参加しました。当時二十二歳。結婚が遅れて四十代で結婚をしましたので、私の母親が生まれたのが遅かったんです。だから、曽祖父でなくて祖父なんですけどね。この人が系図の、自分の行の最後の部分に「書いてくれ」と言い残したことがあるんです。何かといいますと、私の祖父の父が久五郎といいます。太次郎の父親ですね。

「父久五郎誤テ斎藤平兵ヱニ地券十七枚ヲ貸シ終ニ流地トナリ家禄ヲ失フナリ」

と書いてあるんですよ。祖父の「辞世」ですよね。四十五年間、懐に怒りを抱いてきた男が、つぶれた農家の長男が死を予感して「書いてくれ」と言ったんですね。で、一行だけ村人が書いたんです。要するに、恨み骨髄で四十五年間過ごしてきまして、したがって「付和随行」なんて簡単なものじゃないわけですね。これが秩父事件というものですよ。歴史家の方がもうちょっと緻密に言うでしょうけ

れど、私はもうこれで十分わかっちゃうんですね。

さて、その伝蔵という人は、平和論者です。合法主義者なんです。彼は「為人沈毅剛胆、而かも容貌婦人の如く」といわれるんだけれど、玉三郎みたいな人だったんですよ。伝蔵というのは、自由党に入党をするわけですが、明治十七年九月二十七日に、村々の総代を集めた会議があったんですね。「借金の証文をもって郡役所と交渉をしよう」というので会議をしたんです。総代が、村々に散っていた借金の証文を持ってる人たちを、減免してくれというのをもらって、郡役所へ持って行こうという会議ですね。

この時に、

濁なき御代に者阿れど今年より八年之後はいとゞ寿むべし

というのを墨に書いたのを配ってるんです。なぜ配ったんでしょう。二年十カ月前の歌ですよ。作ったのは明治十五年なんですからね。彼はやっぱり「国会開設で国というのを変えましょう」と、ここでも言ってるんです。立憲政体を作って、憲法を制定をして、民選議員による国会の運営、自由・自治というものを保障する、地租を軽減する、そういうことを最後までやってたんですね。

「武装蜂起に勝算はなし」と彼は必ず思ってたでしょう。なぜでしょう。彼はしょっちゅう自由党本部に行ってまして、中央の情勢をよく知ってます。そして、政府には西南戦争を勝ち抜いた軍隊がある、ぐらい知ってますよ当然。西郷の軍隊と半年間戦って勝った軍隊がいるんですよ。農民の火縄銃が勝てるわけないんですからね。そんなことを知らないということはないです。

そして、十月の時点で自由党というのは解党するわけです。十月二十九日だったでしょうか、秩父事件の起こる数日前ですよ。その解党論というのは十月の初めから出てるんですから、伝蔵も当然分かってます。自由党は解党するな、「関東一斉蜂起」というのはもうやれないな、と分かってるんですね。したがって、総理の田代栄助という人に説得をするんですよね。「一カ月猶予をくれ」「だめ」とやって、「二週間ではどうか」「だめ」、「一週間では」「だめ」と。

農民というのは生きるか死ぬかなんですから。裁判所から「差紙」が来るわけでしょ。出て行くというと「破産」ですからね。生きるか死ぬか。そこで「でも最後まで交渉しよう」と懸命にやってるんですよ。ところが、郡長のところへ行ったら「金を借りるのも馬鹿である。他人のために交渉に来るのも馬鹿である」と言ったんですよ。「交渉だに愚なり」と言ったんです。それで五十人ばかりの交渉団が追い返されるんですよ。警察官で蹴散らされちゃうんですね。

それで今度は、高利貸しの方へ談判に行くんです。そしたら、高利貸しがこう言ったんです。「我々は、服部判事(裁判所の)に、月々十五円のわいろを贈ってます。お前らの言うことなんか、聞く耳は持ちません」。これが火に油を注いじゃったんです。この時点まで困民党の人たちは、まだ武装蜂起は考えてないんです。この発言を受けて緊急に、十月十二日に、会議をして武装蜂起を決めました。

農民に武器を取らせたのは「官」なんです。農民が好んで取ったのではないんです。農民というのは、普通は武器というのは取らないですよ。もともとそんなのないんですからね。火縄銃ですから。

政府軍の方は、発明されたばかりの田村銃ですよ。火縄銃一発撃つ間に、田村銃は二十発なんですから、勝てるわけないですからね。

それで、確かに負けました。惨敗しちゃったんですね。そして伝蔵は十一月四日に本部解体と同時に逃げましたね。私でも逃げますね。なぜでしょうか。この国はどうなるのか見たいですからね。で、伝蔵というのはもともと武装蜂起の時点で「あっ、この蜂起は高利貸し征伐で終わりだな」と考えたでしょうね。政府を転覆するなんてできない、変えられないというのは、もうはっきり分かるでしょうね。

ということで、北海道へやって来ます。石狩の地、ここを踏んだのが明治二十一年ですね。そこで「尚古社（しょうこしゃ）」というのがありまして、この結社がすごい俳諧の結社なんですね。財閥だとか、村山家、井尻家の番頭さんだとか、中島呉服店（マル五・大きな呉服屋さん）、郵便局長、校長さん、町長、神主さんとかお坊さん。超エリートですよ。田舎のヤン衆が数千名ゴタゴタいた町の、三十人の超エリート集団なんです。そこに伝蔵さん、ポンと入っていくんですね。正直言って、どうして入れたのかなと不思議でしょうがないんですけど。流れ者が、パッとこう入っていく。やはり玉三郎級の人というのは、違うんだなあと思いますけど。それとひとつはやはり、人格と同時にどうも俳句の力量なんですね。

そこで、伝蔵さんの俳句というのに入ります。私はここからが専門なんですよね。今まで話したのは専門外なんです。伝蔵の俳句、これがすごくいいんです。

明治の俳句というのは正岡子規が改革する前、月並俳句とされたでしょう。どんな俳句かという人が多いんですね。当時の最も大宗匠で、金を稼いでた先生は金羅夜雪庵（きんらやせつあん）という女の人ですよ。

出過ぎぬは人もかぐわしフキノトウ

出るくいは打たれるというのを背景にして、教訓をいってるんですよね。こういうの月並俳句というんです。詩じゃないんですよ、これ。

こんなのもあります。くだらないんですよね。

犬吠えた夜に減る寺の熟柿かな

泥棒が来て犬が吠えた夜、お寺の熟柿が減ってたなんて、つまらない。これが当時の流行なんですよ。これを正岡子規が変えていくんですね。明治二十五年ごろを境にして変わります。

伝蔵さんの明治二十六年の句に、こういうのがあるんですよ。

梅雨晴や手向けの水に立つ煙

井戸水からくんだばかりの水の表面から湯気が立ってるんですね。冬寒の気候のところで。それとね、井戸水があったかいものですから、そこからほのかに湯気が立ってるんです。それを詠んでる。繊細なんですね、実に。月並俳句じゃないです、これは。

そして、こういうのもある。同年、明治二十六年（一八九三年）、ちょうど四十歳ですね。

汲み上げる釣瓶手かなし初嵐

伝蔵は二十四歳下のミキという少女妻をもらうでしょ。その人を詠

んだらしい。初嵐というのは秋の初めに吹く強風ですね。なんて繊細な句なんだろうかとびっくりしますよ。明治二十六年代にこんな句を作った。現在この句を出しても、俳句の会で通用するんですね。月並句じゃないですから。

それからこういうのもあるんです。

照り返寿夕日の暑し秋の蝉

これは、ほかの尚古社の人たちの句とも違います。どこがかといいますと、この句には夕日に照らされて赤々と染まってる作者自身の姿があるんですね。こういう句は、明治の二十年代なんかにはほとんど一句もないですよ。

それからこういうのもあります。

浴ミして端座を壊し初嵐

「端座」というのは、かしこまって座ることですね。「壊し」足を投げ出して座る。「壊座」という言葉がありますけどね。座をくずす「壊座」。ここにも作者がいるんですね。れっきとして、ここにね。こういう句というのは、この時代にはなかったです。

感情表現の句というのがあるんですね。俳句で「悲しい」という言葉はあまり用いないんです。用いない方がいいというふうに現在もいわれてます。こういう句があります。

思ひ出すこと皆悲し秋の暮

これは、村山家の支配人、加藤円八さん（有燐雅《ゆうりんが》という俳号）の奥さんの死を悼んで作ったんです。こういうふうに、感情を率直に表現するという句を堂々と作ってますね。

そして、尚古社の人たちと一緒に情歌という都々逸を作りました。明治二十八年、四十二歳の時です。

宵に勇んだ夕部の客も今朝は思案の胸算用

サケ・マス漁で盛んになって、漁師だとかヤン衆が金を懐に、くるわに繰り込んだんですよ。「宵に勇んだ夕部の客」くるわに遊びに行く。「今朝は思案の胸算用」おもしろいですよねぇ、伝蔵ってね。よく観察してるんです。朝帰りの男が、しょんぼりしてくるわけですね。懐も体もやせ細っちゃって。それを「今朝は思案の胸算用」とくる。このセンス、非常に素晴らしいですね。これはうまい都々逸ですね。

そして問題になる句が一句あります。それは明治三十年、四十四歳の正月に作った句なんですね。

御降りや仰し顔に一ト雫

という句なんです。「御降り」というのは、正月三が日に降る雨や雪のことです。「仰し顔に一ト雫」。何でもないような句ですけど、晴れやかな句ですよ。なぜかといいますと「御降り」というのは、その秋豊年を予測する雨なんです。江戸時代の句にこんなのがあります。

御降りやまず思わるる秋の色

正月の御降りが降ってます。まず思われるのは、秋の黄金の実り色だっていうんですよ。という具合に「御降り」というのは、豊年の吉兆なんです。で、「御降りが降ってきました。仰いだら顔に一粒ポツンと当たりました。今年は豊年だなあ」という句なんです。

ところが、この句は「英照皇太后陛下追弔の意を捧表して」の追弔句なんです。弔いの句なんですよ、これ。普通こんな弔いの句はないですよ。なぜこの句を作ったんだと私は不思議でしょうがなかったんですよ。そしたら、この時「大赦令」が出てるんですね。

実は伝蔵は、明治二十二年の「憲法発布の大赦」で法律上は無罪になってるんですよ。でもずっと変名で、伊藤房次郎として逃げてました。伝蔵というのは代書業をしてるんですから「大赦令」があったことを知らなかったなんて、そんなバカなことはないですよ。少なくとも法律にかかわってるんですから、新聞なんか、くまなく見るでしょう。皇室が生まれるとか亡くなったとかなんていったら「大赦」がでるなぁって。案の定、明治二十二年に出ました。

で、明治三十年に「大赦」がやはり出ました。これでもう「無罪が確定したな」と思ったでしょうね。喜んで仰いでるわけですよ。だから尚古社の人たちは「伝蔵さんの句、なんかこう晴れやかな句ですね」なんて言ってたんじゃないですか。不思議なって。「弔いの句としては不思議な歌ですね」なんてね。「御降り」なんですからね。だけどね、伝蔵という人は名乗らなかったですよ。「私は井上伝蔵です」と言わなかった。

なぜなんでしょうかと私、本を書いてから考えました。そうしましたら、井上伝蔵の友人に飯塚森蔵さんというのがいるんです。年齢はあまり変わらない、森蔵が伝蔵の一つ下ですかね。教員をしてました。この人は、田中千弥の愛弟子だったんです。彼は積丹じゃなく、四国で亡くなるんだけど、明治二十三年、田中千弥はこう言ってるんです。

「明治二十三年、赤柴山に雪の残るころ、金剛院から出て行く森蔵を見た」

と言うんです。飯塚森蔵は伝蔵と一緒に、村に帰って潜んでたんですね。伝蔵は二年間で出ましたけど、この人は六年間いました。金剛院って大きな寺ですよ。かくまわれたんですね。それで、二十三年の早春に旅立って行っちゃうんです。田中千弥が「見た」とちゃんと語ってるんです。自分の愛弟子の森蔵が出て行くのを、見間違うはずなんかないですよ。おそらく田中千弥は、潜んでたのを知ってたんじゃないでしょうか。六年いるんですから。きっと差し入れくらいはやってそうですよね。考えは違うんだけど、農民というのはそういうものですよ。差し入れ持ってったでしょうね。ジャガイモとか大根とか。

こういうふうにして生き延びて、二十二年の「憲法大赦」の翌年の春に出て行くんです。なぜなんでしょうか。寺にいるんですから坊さんが「大赦が出たぞ」ぐらい教えてくれますよ。新聞にだって出るんですからね。お坊さんというのは教養人なんですから。六年もかくまって「お前はもう今年は放免だ、赦免だ。大丈夫だぞ」と言ったでしょうね。ところが名乗り出ることなく、四国の方へ旅立って行くという。

なぜなんでしょう。考えたんですよ。多分彼らは自由党員ですから、明治政府と戦ったんです。政府のお恵みは受けたくないんですね。「大赦」を断ってるんです。伝蔵も多分そうですよ。敵対した政

府、官僚を前に「ありがとうございました」なんて言えません、男一匹。それは伊藤房次郎で通すでしょうね。で、ずっと貫いたんです。最後の最後に言うわけですよね。

石狩の中島家ですが「尚古資料館」はものすごい資料です。宝の山ですよ。春光寺の前川先生が「尚古社は宝の山ですよ」と言ってましたけど、本当にすごいですよ。勝海舟の書、吉田松陰の書とか、西郷南州とか、すごいんですよね。俳句の方では、江戸期の俳人の短冊なんかもいっぱいあるんです。何十億円かわからないです。早い話がたとえようがないくらいです。正直に言いますと、防火施設の建物に置かないともったいないですよね。私費を投じて作ったんですかね。中島家ってすごいですよ。大したものですね。

その人の先祖が鎌田池菱（ちりょう）といって、尚古社のリーダーなんです。この人が、明治三十五年の俳句の、会員の記録を全部書いてあるんですよ。総句ですね。そこに伝蔵の句があるんです。こういう句です。

山路来て其日も過て不如帰

わけの分からない句です。俳句にこんな句はないですよ。作り方が変なんです。分かりますか。俳句としては未完成品ですよね。ところが私はこれは多分、短歌的発想の句だと思います。短歌にする措辞です。「山路来て其日も過て」とくる。私が柳蛙（りゅうあ）伝蔵に成り代わって、短歌を作ってみました。こんなふうにしようとしたんじゃないかなと思います。

山路来て其日も過てふるさとよかなたにありて悲しかりけり

なぜかと言いますと「山路来て其日も過て」とたたんでくるでしょ。はるばるやって来たなあ。「其日」というのは青春時代の渦巻く日ですね。「其日も過てふるさとよ」と続いたんじゃないでしょうか。「かなたにありて悲しかりけり」。ところがそういうふうに短歌に詠むと、伝蔵さん、くずれちゃいますよ。逃亡死刑囚になって、潜んでるんですからね。そしてやむなく「不如帰」で切ったんですよ。不如帰というのは、激しく鳴く鳥です。

ほととぎす鳴くや頭痛のぬけるほど

というのを一茶が作ってますよ。声が激しいんです。伝蔵さんはこの「不如帰」で、沈んでいる望郷の心というのをパーンと切っちゃったんです。俳句で救われたんですね。短歌だと伝蔵さん、まいりますよ。短歌というのは泣きますからね。啄木はよく泣いたでしょう。思い出しても啄木はよく泣いたなあ。最後の七・七で泣いてます。

東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたわむる

たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三歩あゆまず

北上川柳目に見ゆ泣けとごとくに

最後で泣いちゃう。短歌だと多分「悲しかりけり」になったと思うんです。俳句を続けていった理由というのは多分、自分自身の沈み込んでいく心理というのをこう、浮上させるんでしょうね。虚子さんという人は、俳句は「ものをよく見ながら、沈んでいく気持ちも救われる娯楽の文芸だ」と言ってるんですけどね。娯楽ほどのことはないんだけれど、やっぱり救ってくれるんじゃないでしょうか。

伝蔵が俳句に執着した理由というのは、まずは尚古社のメンバーと交流をして、代書業を円滑にしようというのが一点でしょうね。食わなきゃならんかった、と同時に俳句という詩を通して、自分自身の内面の葛藤のようなものを払拭したんじゃないでしょうか。

こんな句もあるんですよ。

暮て散る花には風も一層よし

そんなこと言うけど、怒られますよ、普通は。「月にむら雲花に風」忌むべきことですよ。「花には風も一層よし」は「散っちまえ」と言ってるんですからね。暮れてもう見えないところで散るんだったら、風で一遍に吹き払われてしまった方がいいと。ここでやっぱり潔く反骨精神みたいなものが見えますね。

そして、

俤の眼にちらつくやたま祭

という句が同じ年に出来てます。『尚古集』を出して、尚古社の先輩の法事、大法要をやりましたね。そこにこれが出てます。これはもちろん単なる追弔句じゃないですよね。井出孫六先生が言うとおり、これは倒れていった秩父事件の同志たち、その俤がちらついていたに相違ない。なぜかというと「山路来て其日も過て」という句と、同じ年に出来ているからです。これが何よりもの証拠なんですよね。私は「ああ、なるほどそうか」とはっきりと分かったんですよ。

それからこういう句もあります。

名月や軒に光りし蜘の糸

非常に繊細なんですよね。蜘の巣じゃないんですよ。一本の糸です。流れてるんですね。それが月光にキラキラと光ってる。それを詠んでるんです。そういう非常に繊細な句なんですね。そういうふうに、やはり伝蔵さんという方は、男前もいいけど実に繊細、そして反骨精神を維持して、一生涯を終わったんじゃないでしょうかね。

石狩の人たちは、二十三年間支えてくれたんですね。中には当然ちょっと「何者だろうか」なんていぶかしむ人たちもいますよ。でも北海道というのは、そういうのをあまり問わないみたいですね。いろんな人がいるからでしょう。当時は脱獄した人もいるかもしれないし、いまいち分からない。

でも伝蔵さんの人となりというのは、凶悪犯じゃないですよね。物腰が柔らかい、字も書ける、俳句もうまいんですから。「ただ者じゃないぞ」と思ってたわけでしょ。ただ者じゃないんですから、本当に。二十五歳で村議会の副議長をやってるんです。将来は必ずこの人は村長です。伝蔵が秩父事件でいなくなった後で次々に、後輩の筆生がみんな村長になりました。伝蔵というのは村長、または県会議員。なぜかというと、義理の兄の弟、宮川四郎というんですが、県会議員に出てるんですよ。伝蔵はそれぐらいの人物なんです。政治のひのき舞台を歩けた人なんですよ。それが、秩父事件に参加してるんですね。自分の家は決して困ってたんじゃないんですよ。蔵が三つあるんですよ。母屋があって、中庭に噴水があるというんですから、すごいんです。デフレでいかに貧乏したって、借金を抱えて母屋が傾く、そんなことない。逃亡に際しては、きっとお金を持って出たでしょうよ。

それは、父親の類作の別居していた大きな農家が、明治二十二年に斎藤謙二という人の名義に変わりまして、おそらく伝蔵が逃亡の際に、千数百円を持たせていた。井上類作という父親の家に、伝蔵のお姉さんのミネという人がいたんです。この人が、斎藤謙二という、戸長をやった質屋で実業家で金持ちの愛人だったんですよ。戸長時代に、愛人の家から役場へ毎日通ったんですよ。『田中千弥日記』にちゃんと書いてあります。だからメモ魔というのは恐いですね。そんなことまで書かれちゃう。その人が結局、伝蔵の親父さんの田畑を買って、ほかの例で見ますと、換算をすると約千五百円ぐらいを、きっと持たせたと思いますよ。だって党首がどこかへ逃げて行くんですよ。

で、伝蔵さんは悠々と北海道へ来るわけですね。石狩の人たちの温かい気持ちのその中で。石狩というのはいいとこです。私もここへ住みたくなりました。(笑) あったかかったんです、とってもね。

そういうことで、この本を書きました。『北へ…異色人物伝』という、こういういい本も北海道新聞社から出てます。ぜひ一緒にこれからは、私のほうにもいろいろ教えていただきたいと思います。今日はここに、俳人の方もいらっしゃるようで。歴史家もいらっしゃる。私、俳(廃)人同然という人間なんです。(笑)

今月号の角川の『俳句』四月号で六十代の特集というのをやってるんですけど、百四十二人、六十代が出てます。このうち出させてもらったんで、この図書館にもあるそうです。八句、私も出てます。「中嶋鬼谷(きこく)」というんです。どんな俳句作ってるのかと興味のある方はぜひ読んでください。本屋にも出てます。

この本は本屋にないです。知道出版社が小さな本屋なもんですから、本屋にはまず出ません。秩父の本屋にあるんですね。

それと、ここに、NHKラジオの「こころの時間」というのを聞かれてる方、いらっしゃるかと思うんですが、六月から三回にわたって私が出ますので、聞いてみてください。NHKラジオというからスタジオでやるのかと思ったら、秩父でやったんです。現地の方がいいというんで。そんなふうなこともございますので、ぜひぜひよろしくお願いいたします。

時間、ですよね。どうもどうも。それでは終わります。

本講演は、平成十三年三月三十一日、石狩市民図書館視聴覚ホールで行われた図書館講座を文字起こししたものである。文字起こしは吉本直江さんが行った。

中嶋幸三氏プロフィール

なかじまこうぞう。俳人、俳号鬼谷(きこく)。一九三九年埼玉県秩父郡小鹿野町(旧長若村)生まれ。八九年に加藤楸邨に師事。その後、加藤楸邨主宰の俳句誌「寒雷」同人に推挙される。浦和で『雁坂俳句会』を主宰。句集に『雁坂』(九二年)、編著書に『加藤楸邨』(九九年)。二〇〇〇年九月には『井上伝蔵　秩父事件と俳句』を出版。調査のため三回来石。東京都在住。

石狩浜のコダマガイ

吉岡　玉吉

はじめに

石狩浜のコダマガイはいつ頃から生息していたか定かでない。そればかりか生産の対象魚介にもなってなく、わずかに子供らの浜遊びの道具、程度で終始していた。

平成期に入りグルメ志向が取り沙汰され、一部の漁民によって採取され巷の食材として出回るようになって、近年では生産の対象となっている。この他、海水浴時の浜遊び対象魚介となり、その採取する様子は石狩浜の夏の風物詩ともなっている。

このようなことで、海浜の生物として取り沙汰されてきているところから知り得る範囲で記述してみることにした。

第一章　コダマガイについて

1　学名

コタマガイ　まるすだれがい科（ハマグリ類）

地方名　石狩浜―コダマガイ、ハマグリ

2　まるすだれがい科

殻は小型より大型に及び、殻形は種々あるが多くは卵形、類円形、あるいは丸みのある三角形で、美しい彩色斑紋がある。靭帯は外在して後位である。主歯は強く各殻片は三つあり、前後の筋痕（きんこん）はほぼ等形で套線（とうせん）に湾入する。

種類は甚だ多く、また美味のものも多いから食用に供せられ、種苗の養殖によって量産されている。貝殻は粉にするか、あるいはそのままの形で玩具、薬盒（やくごう）などに利用されている。

3　コタマガイ

殻は中位の亜三角形で膨れは弱い。殻頂はほぼ中央にあり、両背縁は直線状に急降下する。後腹端は鈍く尖り腹縁はあまり張出していない。殻表には成長輪脈があるが、弱くて殆ど平滑である。色彩斑紋は変化が多いが、白色ないし淡褐色の地に灰青色の放射彩、点彩、線彩、網状紋などがある。北海道中南部以南の浅海帯に生息する。

4　生態

本種の成熟する年齢は二年前後で、殻長一五ミリ位で成貝になる。産卵期は七～九月頃で盛期は八月頃、雌雄異体で産卵すると推定されている。

石狩湾では潮間帯の銭函海岸、オタネ浜から以東石狩浜、石狩燈台下周辺までの水深三〇センチ以浅から一メートル前後の砂底に埋没して生息する。餌は珪藻（けいそう）、鞭毛藻類（べんもうそうるい）が主である。

第二章　石狩浜のコダマガイ

1　コダマガイ、及びハマグリの由来

ア　コダマガイ

学名をコタマガイと呼称されており、その名が浜言葉となってタの発音が濁り、コダマガイと発音するようになったものと推定する。

イ　ハマグリ

石狩浜では、ハマグリよりも小型であるが表殻がハマグリと似ているところから、誰が名付けるともなくハマグリと呼称するようになったもの。現在でも本町地区の人々はハマグリの名で親しんでいる。

2　石狩での採取状況

十線浜を中心に、石狩湾新港付近の三線浜周辺の漁民家族によって八、九月頃を盛期として、小型鋤簾（じょれん）を使用して採取し出荷するなど、かろうじて生産の対象種として認められるようになった。

平成五年　一・二トン　金額　二五八万円
平成六年　〇・六トン　金額　一五七万円
（主要年次魚種、漁獲高推移　石狩市調査）

その後目立った量産はないが、家内漁種的に生産され食卓にのぼっている。

3　子供の頃の思い出

―夏休みに入った子供らの潮干狩りの対象となっていた

昭和一二、三年（一九三七、八年）頃は季節的に西浜（現名・石狩湾新港）の海浜付近にハマグリ（コタマガイ）が生息するのが知られ、子供らの遊びの対象となっていた。

夏休みに入ると、七、八人のグループで握り飯を作ってもらって西浜まで渚を歩いて行き、ハマグリ採りをしたものである。用具とてなく、褌（ふんどし）一つになり足と手で、立ったり、四つん這いになって砂中の貝縁を探り、触った感覚で掴み取る。足の裏に触った瞬間、貝が大きいか、小さいか見極めることが貝採りの醍醐味でもあった。一定の時間を決めて採取し、形の大小や数の多少を競うのも優越感を誘い面白かったものである。午後三時頃まで採取して、一人一五〇ヶから二〇〇ヶ位を袋（日本手拭いを縛ったもの）に入れて持ち帰り、夕食の味噌汁の具として喜ばれた。子供心に食事の一片食の足しになったと優越感に浸ったものである。

近年では子供から大人まで、このコダマガイ採りが盛夏の石狩浜の風物詩となっている。

4　利用加工について

一晩海水（塩水）に入れ、砂抜きして味噌汁の具が一番、続いて吸物（しょう油味）。長ねぎなど小刻みにして、はなして出来上がり。

昨今、小樽市勝納埠頭のレストランで定食を頼んだらコダマガイの味噌汁が出た。でも我が家で作る味噌汁が一番。次は砂抜きして酒蒸し、それからバター焼きなどなどが定番である。

おわりに

以上、石狩浜のコダマガイの一端を記述したが、意をつくせぬところは先行研究のご著者に深く敬意と感謝の意を表し、併せて協力を頂いた田中實氏、中島勝久氏、荻原紘二郎氏にお礼を申し上げる。

平成一三年三月一二日

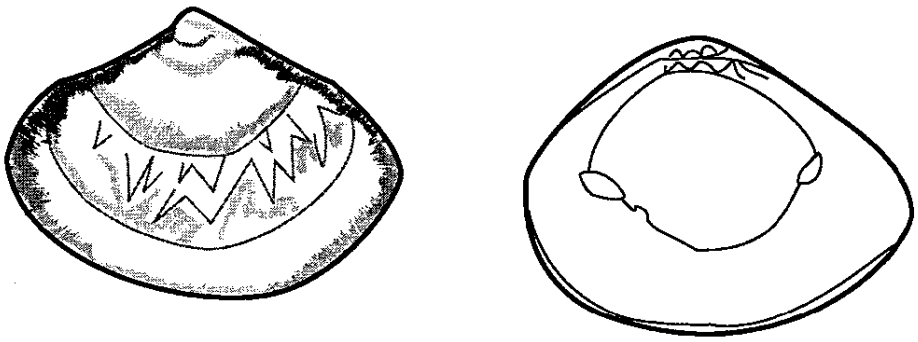
引用文献

『原色日本海岸動物図鑑』　昭和二九年九月五日初版　著者　吉良哲明
『漁業生物図鑑　北のさかなたち』一九九一年六月発行　北日本海洋センター
『石狩町年表』　昭和四三年三月　編者　田中實

資料一

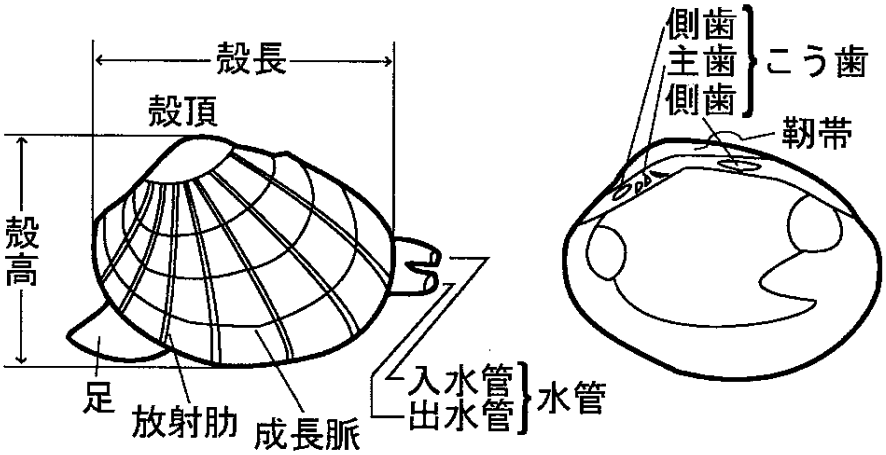
コタマガイ概要図

外側　　内側



資料二

貝の部位



石狩浜の蜆貝（しじみがい）とその模様

吉岡　玉吉

はじめに

近年では養殖事業により石狩川河口付近、燈台下中州周辺、遠浅の砂泥底でシジミの生産が期限付きであるが、良好に操業されている。昭和一〇年（一九三五年）代では、石狩川にまだ合流されていない厚田領の聚富川に自然繁殖していたが、生産の対象とはならず、子供達の遊戯の対象となっていた程度であった。

一、学名

ヤマトシジミ（大和蜆）　ハマグリ目シジミ科

地方名　シジミ、シジミガイ

石狩浜ではシジミ

二、形態

殻の縁は卵形で殻頂が膨らんでいるため、全形は丸みを帯びた正三角形である。靭帯（二枚貝類の左右の貝殻をつなぐ物質。一般に殻頂の後方の外側にある）は殻頂の後方にある。殻の表面には細く明瞭な成長脈（貝類の貝殻に成長と共に刻まれるたくさんのすじ）がある。殻の色は殻長二ミリ位までは淡白色、四ミリ位から紫斑が現れ、八ミリ位から黄緑色になり、二〇～二五ミリ以上で光沢のある黒褐色となる。三〇ミリ以上で殻頂の殻皮が削れて白色になるのが多い。殻の内側はつやのある淡紫色だが、套線（《とうせん》貝殻の内側に残る外套膜《がいとうまく》が付着していた線状の跡）内にはつやがない。

三、生態

サハリン、北海道、本州、四国、九州及び朝鮮半島に分布し、この域の河口域や汽水（河口域の比較的低塩分の水）湖の砂泥底に埋没して生息する。北海道産のシジミは、以前はサドシジミと言われていたが、これは本種の異名（分類学上ひとつの種に与えられた多数の学名のうち、正しい学名以外のすべての名。異名＝本名又は本来の呼び名以外の名称、別名）であり、ヤマトシジミが正式な名称である。

成熟する年齢は満二年、殻長一五ミリ位、産卵期は七～九月で盛期は八月。雌雄異体で卵生、産卵期には内臓嚢（ないぞうのう）の色が雄で淡黄色、雌で灰黒色になり肉眼で識別出来る。

淡水産のマシジミは卵胎生で、外套腔（がいとうこう）の中で幼生期を過ごすが、ヤマトシジミは卵と精子を水中に放出してから受精する。

本種の発生は、淡水中や海水中では正常に進行しない。受精卵は翌日にはD型幼生になり約一〇日間浮遊した後、底生生活に移行する。沈着直前の浮遊幼生（浮遊生活をする幼生）の殻長は〇・二一～〇・二二ミリである。底生移行後四ヶ月で殻長一〇ミリに達するが、水温一二・五度以下で成長は停滞する。

成長は地域によって差があるが、満三年で殻長二〇ミリ、重量二・七グラム、

満五年で殻長三四ミリ、重量四グラムに達する。

餌は珪藻（けいそう）、鞭毛藻類（べんもうそうるい）、ワムシ類などである。

四、漁業の状況

1　本道における漁業状況（概要）

主な漁場は網走湖、天塩川（青シジミ、黒シジミ。青シジミは二、三割高）、風連湖のほか、寒シジミで有名な藻琴湖である。漁期は網走湖では五月～一〇月、天塩川では五月～一一月、風連湖では四月～六月、藻琴湖は冬期である。

漁具は主に鋤簾（じょれん・土砂を掻きよせる用具。長い柄の先に箕または網のように編んだもの、そのほか鉄製板用の歯を取り付けたもの。この用具を改良して川底の砂泥部を掻き、貝類を捕獲する道具）で、小型桁網（けたあみ）を動力船でひいて漁獲するが、藻琴湖では胴付長靴を履いて歯の付いたタモ網で漁獲している。

2　石狩浜のシジミ漁

石狩浜のシジミ漁の期間は資源保護のため貝型三〇ミリ以下を制限し、例年四月上旬から一ヶ月、九月上旬から一ヶ月の二期に分け、午前六時から同九時までの約三時間位の時間帯で採取する。採取場所は石狩川燈台下、中州付近の遠浅砂泥底（七〇〇～八〇〇㍍四方の狭範囲）で主に磯舟で現場に至り、鋤簾を用いて胴付長靴又は磯舟上から同用具で採取している。

漁獲量は一人一日四〇～五〇キロと制限され、卸値一キロ四〇～五〇〇円、春シジミは一〇〇円高が一般である。

石狩浜のシジミ貝は自然繁殖は少なく、近年は網走漁業協同組合から稚貝を移植して養殖し操業している。資源保護のため目合（めあい・網目の大きさ。一つの網目はその角に四つの結び目を持つが、対角線上の結び目を持って網目を伸ばし、その長さを計ってミリ又は寸で大きさを表す。網全体を同様に網目の対角線上に伸ばし、ホタテ漁の場合、五寸（一五一・五ミリ）の間にある結節の、起点のものも含めた数で表す場合もある。この場合の単位は節（ふし、せつ）という。シジミ漁の場合は鋤簾の網目をいう）制限を期間制限と共に行っている。

採取漁業者は定置網からの転出者、ホッキ桁網漁からの転出者（一〇名）によって漁獲されている。

3　石狩浜のシジミ漁年次別漁獲高

年度別	数量	金額（千円）
平成二年	四・九トン	三，〇三九
平成三年	〇・二トン	一一九
平成四年	一〇・二トン	六，〇〇〇
平成五年	一二・〇トン	七，四〇〇
平成六年	一五・二トン	九，五五七
平成七年	一九・〇トン	一二，六二四
平成八年	一六・〇トン	一〇，〇三八
平成九年	一五・〇トン	九，三九一
平成一〇年	一五・三トン	一一，〇七〇

平成一一年　九・六トン　六，三一五
平成一二年　六・四トン　四，五五二

石狩市調べ

五、シジミ貝採取余話

1　シジミ貝は石狩浜の子供らの遊びの道具、程度で生産の対象ではなかった

石狩浜の主要魚介類は、鮭、鱈、鰈類、ホッキ貝及び厚田浜に回り船で出漁する、鰊刺し網漁であった。

昭和一〇年（一九三五年）頃では石狩川にシジミの生息はなく、わずかに厚田村との境界である聚富川（石狩川の浸食により合流にならない前。合流は昭和十年前後と記憶する）の無煙浜よりに自然繁殖のシジミが生息していた。

小学校の夏休みに入ると、シジミ採りに八幡町の子供らはもとより本町地区の子供らも握り飯を作ってもらって、ピクニックよろしく三キロ余りの道程を四・五人のグループで袋を持って出掛けたものである。

本町地区からは渡船。子供船賃二銭位を出して渡り、川沿い（石狩川に沿って国道二三一号は走っていた）をガヤガヤ勝手なことを言いながら歩いて行く。後を振り向くと帝国石油の油塔や送電塔がだんだん遠くなっていき、左手川向の燈台が、あたかも手まねきするように立っている。

子供らは、何の感情もなくまばらに立ち並ぶ未知の家々の間を通り過ぎ、やがて石狩川の川尻（河口）に到達する。

なお進むと、その端にうっそうと繁る柏木原が眼前に広がり、やがて目的の聚富川である。柏木原の陰に芝生の広場があり、一同服を脱ぎ、裸一貫、褌（《ふんどし》この頃海水浴では子供達は白か黒の六尺褌をしめる）をしめ、袋を持って川に飛び込む。汗をかきながら川に入ると気持ちよく、シジミ採りより、まずひと泳ぎ。聚富川の川底は砂泥底で深さも子供らの背丈から腰くらいの水深で、「かなづち」でも溺れる心配はないところ。

シジミは、浅間のシジミは小さく、深間ほど大きくなる。採取は器具は使わず足を小きざみに動かし、足裏に触った感覚で、深いところでは潜って採り、浅いところでは四つん這いになって、手と足付近で探り採る。一時間もすると飽きてきて方々を泳ぎ回る。聚富川の「ヌシ」は亀だというので一生懸命に捜すが、誰も亀を見たものはいない。街の人々は「聚富川のヌシは亀だ、見つけても捕まえるなよ」と言ったものである。

やがて採り終わって広場に来て、数を数えて一粒（一個）でも多ければ悦に入ったもので、小さくとも数が多ければ勝ち、いや数が少なくとも粒が大きいのが多ければその方が勝ち、だと競いながら、夕陽を浴びながら家路に急ぐ。渡船に乗る頃、渡船の船長さんに「イッペ採ってきたか、どれ見せれ」と袋を覗かれ、「何だオメ、皆袋イッペになっているのにこんなベッコか」と、採らずに泳いでいたことがばれた一幕もあった（一人一〇〇粒から一五〇粒位採取）。

それでも夕食のシジミ汁はことさらに美味かった。

2　シジミの養殖漁業の提案

昭和一八年（一九四三年）頃、石狩浜の鮭漁、厚田浜の鰊漁は不漁続きの一途で、横町の漁師の生活も先細り様相を呈してきていた。

石狩川の鱒漁も、六月が盛漁期というのに一日五、六本という漁、鮭漁も数えるくらいの漁で、生計も維持できるかと危ぶまれる日々であった。

こんな折、広大な石狩川の水域や海浜の砂底を利用して、魚介類の養殖を考えることが必要ではないかと、若生（わかおい）の湿地帯を開発した養鯉、燈台下中州周辺の砂泥底を利用したシジミ貝養殖を、と父（漁協役員）に漁業会に進言するように提案した。

父は「お前、何を考えているんだ。漁師はだまって鰊を獲って秋味を獲っているのが仕事だ。漁業会でそんな話をしたら笑われるだけだ」と相手にされなかった。

この頃の浜は、不漁であっても一、二年したら必ず魚は帰ってくると励み、専念し、保護や養殖など研究機関の仕事だ、と育てる漁業など眼中になかった時代で、現実主義にとらわれていたところから「漁師はだまって魚を獲れ」となったのではないか。

その後昭和六〇年に入り、河川の水質検査などシジミ養殖に適するか、採算の取れる対象魚介となれるか、と研究され、試験放流されて平成二年（一九九〇年）、四・九ㇳンの水揚げを得るところとなった。

六、利用法

シジミは肝臓機能を助けるビタミンＢ１２が多く含まれている。

主としてみそ汁の具として用いられる。

塩汁、酒蒸、炊き込み御飯（シジミのゆでた汁は投げない）、シジミのかき揚げ、シジミの野菜炒め、シジミのスパゲティー（ケチャップ使用）などがある。

話者

荻原紘二郎（大正一五年生）八幡町

金子　文雄（大正一四年生）横　町

引用文献

・「漁業生物図鑑　北のさかなたち」　一九九一年六月　北日本海洋センター発行

・「主要年次別漁獲高推移」　平成十三年　石狩市役所調べ

石狩浜の漁業―小手繰網漁業

吉岡　玉吉
補訂　田中　實

一、手繰網とは

・手繰網

『広辞苑』によると「引網の一。嚢（ふくろ）網とこれに連結する両翼の袖網とから成り、海底に棲息する魚類を引き入れて捕えるもの。」とあり、小手繰網はこれを小型にして人力のみで操業する漁法である。

・手繰網漁業

手繰網漁業は、すでに古くから行われていたもので、地引網漁業の魚撈法を、船が使われるようになって陸岸を離れた所で操業できるようにしたものである。

漁具は地引網と同じく、一つの袋の両側にそれぞれ袖網をつけ、両袖網には引網が連結されている。最も小型のものでは、漁船を中心として放射状に漁具を打ち回すことを数回繰り返すのが普通である。

引網漁業の中では、漁具の移動距離も最も短い。大型の漁具を使うものでは、網船二隻と手船または漁獲物運搬船を配するものがあり、また網船二隻によって、地引網の両手回しの方法で投網するものもある。

・底引網

『水産百科事典』によると底引網は「引網の一つ。海底に網漁具を沈めこれを人力または機械力で曳航して漁獲するもの。打瀬網、手繰網、オッタートロールなどがある。」とされる。

二、漁業の名称

小手繰網漁業。

三、漁業期間及び許可

1　漁業期間

自　五月一日から八月末日。

注・五月一日から六月上旬まで昼間曳（ひるびき）。午前八時から午後三時頃まで。六月上旬から八月末日まで夜間曳（よるびき）。午後六時から午前六時頃まで。

2　許可証

雑魚小手繰網漁業許可証　北海道石狩支庁（資料五、五ノ一参照）。

四、漁獲魚の種類

ヒラメ（テックイ、アオッパ）、カレイ（マガレイ、スナガレイ、イシモチガレイ、クロガシラ、宗八、ナメタガレイ、カワガレイ《ヌマガレイ》）、アカハラ（ウグイ）、フグ、ホッケ、ワタリガニ（ガサミ）、ガサエビ（シャコ）、カワガニ（モクズガニ）など。主として砂底に生息する魚種である。

五、漁業海域

自　石狩群石狩町地先、「燈台下」、前浜。

至　石狩郡石狩町地先、「火葬下」（注・漁場呼称など。西浜、十

線浜、樽川、オタネ浜の沿岸、沖合い三〇〇間『約五四〇㍍』の海域。

六、小手繰網漁具の状況

1　大正期から昭和初期まで

前述の通り、砂底海域に生息する魚種を捕獲する漁具で砂底地曳網である。網部分は人力のみによるもので、一三・五尋（ひろ）位（二〇・二五㍍位）、重量一四貫位（五三㌔位）、他に藁綱（わらづな）が、出網側三〇尋（四五㍍）、入網側も同様三〇尋（四五㍍ル）。全長七三・五尋（一一〇・二五㍍）の中央に嚢網（ドッチリという）付きの漁具によって操業する。

（1）小手繰網の部分

網部分は出網側が、前網（カレアミという）及び手網（モアミという）、中央に嚢網。入網側は出網側と同様、手網、前網とな藁綱に続く。

前網は綿糸八号（越後アゾ『新潟県で生産される綿糸』のこと。石狩浜ではアンジョ又はアンゾと発音していた）を使用。前網の網目は四寸五分（一三・五㌢）で、長さ三尋（四・五㍍）。手網は網目二寸五分（七・五㌢）、長さ三尋（四・五㍍）、網丈は前網と共に一尋半（二・五㍍）。嚢網は綿糸一〇号、網目二寸（六㌢）、長さ三尋（四・五㍍）、幅一尋半（二・二五㍍）。この嚢網の底、一尋（一・五㍍）の部分は網目一寸（三㌢）とする。出網側、入網側とも、同一寸法に設定されている。

（2）浮子手綱（あばたな）、沈子手綱（あしたな）の状況

浮子手綱は、四匁のトワイン一本に板浮子（いたあば）。椴松製。幅二寸六分（八㌢）、長さ一尺（三〇㌢）を五尺（一・五㍍）おきに、約三枚を付ける。

前網、手網とも、同様の構造で作成する。嚢網の入口には浮力をつけるため、やや大きめの板浮子を付け、魚を追い込みやすくする。

沈子手綱は、六匁位の岩糸（水分を帯びると沈む性質のロープ）を使用し、前網浮子手綱には二〇匁の鉛を浮子手綱板浮子の下に付ける。また、手網沈子手綱には一〇匁の鉛を、嚢網の入口には二〇匁前後の鉛を付けて、砂底に安定させるようにした。

（3）目括り（めくぐり）糸（目通し糸ともいう）

目括り糸は綿糸を使用する。沈子手綱には網目を通し一尺、浮子手綱にも同じ網目を通して五寸間隔に綿糸で固定し、網の片寄りを防ぐことにする。

（4）藁綱（わらづな）の状況

出網綱、入り網綱共に、太さ〇・七寸（二㌢）の荒縄（藁で作った太い縄）各三〇尋（四五㍍）にキンタマ石（六・七㌢の玉石を細縄で巻いたもの）を約七尋（約一〇㍍）おきに付け、前網沈子手綱の付根に「カネ」（鉄製の輪の重り。直径六寸位、重さ〇・五貫目）を付け網の捩れ（よじれ）を防ぐ。

手曳（人力）であるため藁綱は手に馴染み適当であった。またキンタマ石は、海底に定着させることと砂底に回避する魚（特にカレイ類）を追い込む役目をする。その上、網を均等に引き上げる目安にもした。

(5) 堤燈樽（ちょうちんだる）の状況

浮標の役目をする浮樽（うきだる）。醤油一斗樽を変形したもので、高さ三五㌢位、幅、低部二五㌢位、上部二〇㌢位の樽状のもの。上部に竹を十字に折り曲げ、保持部とする（夜間曳には燈火の覆い部とする）。

昼間曳ではそのまま浮標として藁綱とアンカーロープの付根にロープで繋いでおくが、夜間曳では中にローソクを立て燈火して標識とする。当該堤燈樽には大漁祈願とか海上安全などと書き込むほか、屋号などを記入して使用した。

(6) 両爪アンカー（改良アンカー）

海底を底曳きする際、海底に固定するために使用する錨。重五㌔程度で、長さ二〇尋位のロープ（太さ三分位）に結んで海底打つ。（別添小手繰網漁具付図参照）

2 機帆船（動力船）による操業漁具の状況

石狩手繰網組合 昭和一九年一〇月二三日。

（別添資料三小型手繰網漁具一ヶ統当り単価表 昭和三〇年九月参照）

七、石狩浜の小手繰網漁の経緯

石狩浜の漁業は、石狩川に遡上する鮭を主として漁獲する先住者のアイヌの人達によって始められた。

次いで、蝦夷地に進出した和人の人達とアイヌの人達によって鮭漁場が増え、蝦夷地第一の漁獲高を挙げるに至った。石狩は鮭によって栄えた街と言っても過言ではなく、その名声は全国に知られるまでになった。石狩の鮭鱒漁業は前浜の海面と石狩川における地曳網漁が主体であった。

鮭鱒の漁期は、鱒漁は五月上旬から六月下旬の約二ヶ月間、鮭漁は九月上旬から（当時は許可漁業でなかったので、地曳網を中心に一一月の遡上の薄い時期は休漁期として操業していた）一二月末日までであったが、鮭の遡上状況によって漁期にむらがあった。

漁業者の移住は明治初期から越後地方を主とし、明治一〇年（一八七七年）頃から新潟県、青森県など東北地方の漁業者の移住が増え、明治三〇年（一八九七年）には、小手繰網業者代表・金子仁平他二一名が、西浜漁場所有者に対し漁場借用願を提出操業した形跡がある（別添資料A参照）。明治三九年（一九〇六年）頃の「石狩案内」によれば、漁業を営むもの、また従事するもの、七一〇人と記録されている。

これらの漁業者の多くは、鮭鱒漁の雇漁夫として稼動したほか、漁閑期間は出身地の漁法、漁具を考案して沿岸における刺し網漁や手繰漁による雑魚の漁獲、厚田村に出向いて鰊刺し網漁に従事した。

特に新潟県からの移住者の大半は、厚田村の鰊刺し網漁に三月上旬から六月下旬頃まで回船した。

石狩浜に在住した人々は、雑魚漁として沿岸における小手繰網漁、ホッキ巻漁、河川における雑魚地曳網漁、八ッ目漁等の魚撈に従事し生計を維持した。

さて、石狩浜での小手繰網漁業初期時代の記録である明治三三年（一九〇〇年）調査の「北海道殖民状況報文（石狩国）」には、「石

狩前浜ノ手繰網ハ二五、ソノ漁獲ハ鰈二七〇貫、公魚六三〇貫、比目魚（ヒラメ）一〇七貫、蟹（カニ）二五〇貫、合計、七二五円。（中略）雑魚漁ニ業従事スル者ハ其数少ナク猶発達セザルナリ」と記されている。

その後の統計では、明治四〇年（一九〇七年）許可漁業、カレイ手繰網漁業、漁船、五五艘。大正七年（一九一八年）、手繰網、七。大正一二年（一九二三年）六月調、手繰、一八〇。大正一五年（一九二五年）、手繰、一一五、とある（注・大正一二年、大正一五年の操業者数が多いのは、石狩町漁業組合の本町地区の加盟者以外の漁業者が申請許可されたものと思われる）。

八、操業の状況

1　操業者（小手繰網、昭和初年『一九二六年』から昭和一〇年『一九三五年』頃まで）

（1）小手繰網（本町地区のみ）

川島長作（横町）他、一九名（別添資料五参照）。

（2）石狩手繰網

昭和一九年（一九四四年）一〇月二三日結成。

組合員総数、七五名（別添資料一、二、四参照）。

2　操業人員及び船具など

（1）小手繰網関係

①人員、二名

②使用する船

・磯舟、四枚接ぎ（しまいはぎ）、二人子（ににんこ《二人乗りの意》）。又は、川崎（川崎船のこと）、二人子。

・操具、櫓（ろ）、櫂各一丁（櫓のみのものもあり）。

・もやい綱、太さ六分、長さ、二〇尋（三〇メートル）。

注・両船共帆走の設備あり、風向きを利用して帆走する。

（2）石狩手繰網関係

昭和一九年（一九四四年）石狩町漁業組合は鮭鱒の衰退にともなう漁業対策と、戦時下で食糧増産が要求されているところをふまえ、石狩湾内における小型機帆船による手繰網漁を計画し、その準備に入った。

操業開始は翌二〇年五月上旬、出漁船七隻、人員、小手繰網漁者を含めて三八名（別添資料一、二、四参照）で着手することとなった。

五月上旬試験操業に入り六月に至った頃、戦況益々きびしく操業も休日となることが多く、そうするうちに七月一五日石狩空襲となって頓挫、八月一五日戦争終結して石狩小型手繰網は消滅した。

3　川崎船の特徴

『広辞苑』によると、

①山形県庄内地方の漁民が藩統制下の魚問屋の拘束から脱して、秋田近海に出漁した漁船。

②山形、秋田、新潟の漁民が北海道に出漁した漁船。

③蟹工船などの北洋の母船漁業で、母船を根拠にして操業した和船。

とあるが、石狩浜では新潟出身の漁業者が多く、川崎船に精通している漁民もおり、小樽等に発注し移住当時から使用していた。

特徴としては、杉材を使用、軽装で船高が低く、波切りよくローリング等に強い。操具は主として櫓で、小型でも五丁櫓などで操船出来る。特に帆走を得意とする。

動力のない時代、石狩浜では大難（注・山の見えなくなるまでの沖合をいう。その昔、漁をする船は山を目標に『山を立てる』『山を見る』という言葉どおり、自船の位置を知り漁場の町在を確認し操業したもので、このことからできた形容詞である）に帆走してイワシし網漁、延縄漁に出漁したものである。

この小手繰網漁も、前浜からオタネ浜、十線浜など樽川方面に漁するときはこの川崎船で帆走して漁場に向かったものである。

初夏の夕日を浴びて小樽高島岬にみよしを立て帆走する様子は、石狩浜の風物詩にもなっていた。

4　操業の状況

底曳網漁には大型のもの、小型のもの、沖合底曳網、エビ桁網、底びき、手繰網などがあるが、石狩浜で操業されていた小手繰網漁は沖合底曳網漁の小型のものに属する。すなわち人力による砂底での、主としてカレイ類の浅海魚を対象とした小規模なもので、人員も二人乗り（二人子）の磯舟等で行われた魚撈であった。

（別添資料、付図参照）

操業手順について述べると、まず両爪アンカーを風向き、潮流を見極めて、丈尋、五尋位から一〇尋位の海中に打ち（投げ入れること）、舟を進めて浮樽（堤燈樽）を放ち、藁綱を張る。終ったところで直角にして出綱側、前網、手網、嚢網、入綱側、手網、前網の順に投げ、終ったところで再び直角に藁綱を投入しながら浮樽に至り、胴の間（磯舟の中央部）のネバリ（船の張の部位）にアンカーロープを固定し、舳側と艫側に別れて藁綱のキンタマ石を目当に等間隔で手繰る。

なお、前網の付根のカネ（捩れ止め）に至って網の均等を確認して手早に左右統一し、引き揚げ袋網に魚を追い込み漁獲する。

（別添資料、付図参照）

単純な作業であるが、無動力で全て人力で行う仕事であり、かつ、強い日照りの中、または夜間海上での作業なので身体にはとても堪えた。

出漁時の地曳回数は、昼間曳で六、七河、夜間曳で一〇河（注・河は、回数の意味で河川における鮭地曳網漁の回数から来た方言）を曳くのが一般で、所要時間は一河、一時間位を要したものである。

九、石狩手繰網組合結成と経緯

～試験操業ののち、幻の漁業となった～

戦争（太平洋戦争）たけなわとなった昭和一九年（一九四四年）石狩の漁業は若者たちの出征による就労者の減少、北千島鮭鱒流網出漁の危うさ及び石狩川の鮭鱒の衰退が表面化し、対策に苦しんだ。しかし戦時下における食糧増産の掛声の中で、漁獲量の割当を指示された石狩漁業会は、従来の前浜における無動力小手繰網漁に加えて小型機帆船による雑魚漁獲を計画した。

その結果、この年の一〇月に石狩手繰網組合（別添資料一参照）が結成されるに至った。

この組合組織による魚撈は、小型機帆船（五～一〇㌧、別添資料四参照）によるもので、当時の沿岸手繰網漁（底曳網）としては中規模の形体で沖合底曳網漁に次ぐものであった。

別添資料一に見る役員配置を見ると、当時の漁業会役員がそのまま就任しており、かつ魚撈従事者（別添資料二参照）も船主又は経営者が名を連ねていることから戦時下で若者の所在なく操業者名簿の通りであったと推定される。

また、小型手繰網漁具の一隻当りの装備状況は、別添資料三の「漁具一ヶ統当り単価表」に示されている通り緻密に算出されており、小型機帆船による手繰網漁に対する期待の大なることを物語っている。

操業は、翌二〇年（一九四五年）の五月上旬から小型機帆船七隻による試験操業から行われたが、期待したほどの漁獲がないまま六月が過ぎ、七月一五日、米軍艦載機の石狩空襲による漁家の罹災や資材不足などにより休漁状態になった。八月一五日戦争が終結したが、この後の操業も採算の取れる漁獲に達せず廃止されるに至った。

一〇、漁獲の処理

五月昼間曳頃の漁獲魚は、主として漁家の家族等が札幌方面（ススキノの小料理店や南一二条周辺の道庁舎等が販売先であった）に焼魚（マガレイ、ソウハチガレイ、スナガレイ、イシモチ、クロガシラ、アカハラなど）の行商（『石狩百話』の第三一話、「裏町の女衆」一九一頁に詳しい）をしたものである。

焼魚作りは、各家々の雑倉（《ぞぐら》物置、倉庫）に炉（長さ一間半、幅、五尺）を造り、嫁や娘が炭火で焼き上げ、冷まして石油箱（一斗缶、二個入の木箱）に詰めて、翌朝北自運輸のトラックで宿泊先（北一二条東一丁目、石狩街道筋、大黒湯）に発送したものである。

六月に入り夜間曳になると、漁獲物は日の出と共に運び込まれるので鮮度よく、そのまま（ヒラメ、クロガシラなど）出荷。また焼魚製品も良好となり、漁業組合を通して札幌市場（大通り東三丁目、四丁目、△《うろこ》市場など）に出荷したものである。

話者

宮森梅次郎　大正　八年生　弁天町
宮森　ヒサ　大正一〇年生　弁天町
荻原紘二郎　大正一五年生　八幡町
金子　文雄　大正一四年生　横町

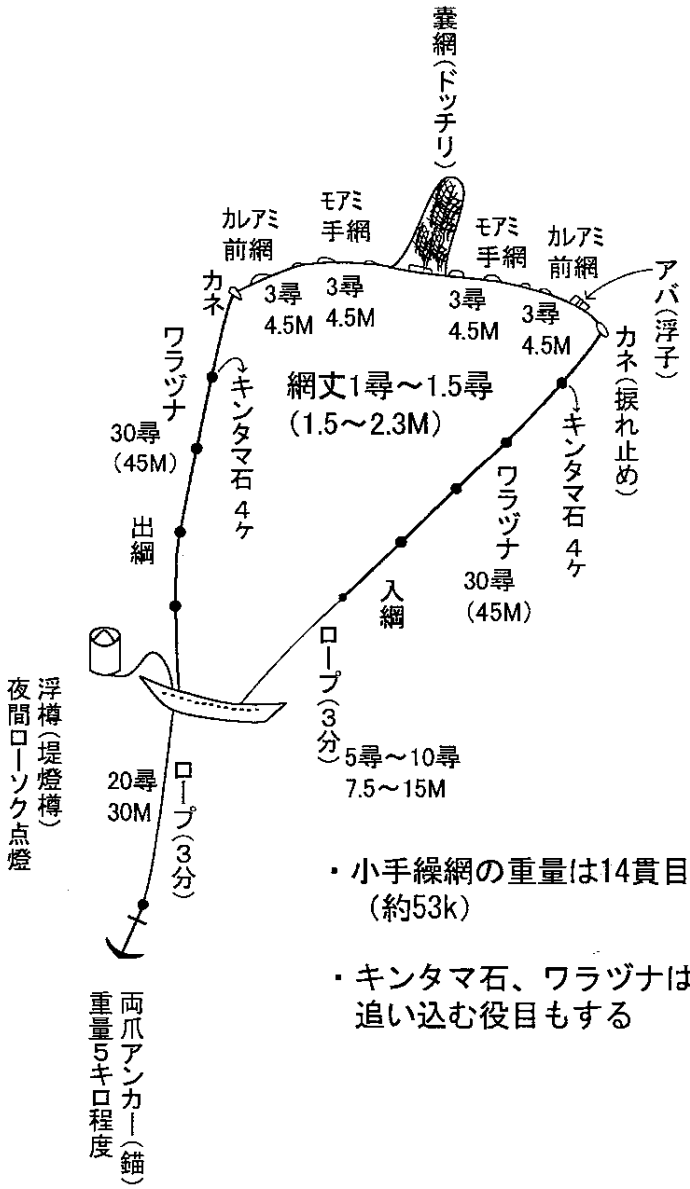
参考資料

・「水産百科事典」　昭和四七年二月一五日初版　水産百科事典編集委員会編
・「石狩手繰網組合」関係資料　昭和十九年十月二十三日作成　石狩漁業会編　田中實氏蔵
・「北海道殖民状況報文　石狩国稿」明治三三年調査　北海道庁編
・「石狩漁業協同組合史」

二〇〇二年三月三十一日　編集者　田中實

小手繰網漁漁具概要図

付図



・小手繰網の重量は14貫目位
（約53k）

・キンタマ石、ワラヅナは魚を
追い込む役目もする

資料A

明治三〇（一八九七）年頃の小手繰漁業者

村山家資料　北海道大学付属図書館蔵　No.一七一九　雑魚漁業／写

西浜海産干場借用証　明治三〇年

住所	氏名	住所	氏名
石狩郡横町十八番地	金子　仁平	石狩郡横町南二十番地	藤井　仁蔵
前同	吉田　三之烝	石狩郡横町南十三番地	阿部　伝次郎
石狩郡南二十一番地	宮下　兼吉	石狩郡横町北四十番地	平野　容蔵
石狩郡弁天町二十番地	有田　惣八	石狩郡弁天町南十一番地	金田　乙次郎
石狩郡横町十八番地	小熊　清次郎	石狩郡弁天町	藤井　與吉
石狩郡弁天町二十四番地	伊藤　幸四郎	石狩郡弁天町南十九番地	澤田　常八
石狩郡横町十九番地	長谷川　仙松	石狩郡横町南二十番地	石山　才仁郎
石狩郡親船町南十二番地	吉川　仁佐	石狩郡横町北二十四番地	吉田　松蔵
石狩郡横町南十三番地	有田　市太郎	石狩郡横町	加賀田　兵太郎
石狩郡弁天町南二十三番地	今井　栄蔵	石狩郡	吉岡　栄松
石狩郡横町北二十□番地	小嶌　貞吉	石狩郡	結城　源太郎

計　二十二名

資料一

石狩手繰網組合役員名簿

職名	住所	氏名	備考
組合長	石狩郡石狩町字浜町	相原　重治	漁業組会長
専務理事	石狩郡石狩町船場町	高澤　武雄	漁業理事
理事	石狩郡石狩町新町	鈴木　傳吾	漁業組理事
理事	石狩郡石狩町横町	吉岡　綱雄	漁業組理事
理事	石狩郡石狩町横町	吉岡　由太郎	漁業組理事
理事	石狩郡石狩町横町	藤井　市郎	漁業組理事
監事	石狩郡石狩町横町	宮下　定治	漁業組監事
監事	石狩郡石狩町新町	平　亀治	漁業組監事

注・昭和一九年度石狩漁業会の役員がそのまま手繰網漁の役員となった

結成年月日	昭和一九年一〇月三〇日
組合員総数	七十五名
操業開始	昭和二〇年五月上旬
就航隻数	七隻
就航隻名	昇龍丸、第十六甚栄丸、第十八甚栄丸、扇松丸、萬歳丸、長福丸、南丸

操業組者氏名

高澤組　六名	南、高澤、岡崎、宮嶋、杉ノ森、有田(久)
鈴木組　五名	鈴木、高澤、相原、有田(留)、田村
吉岡組　二隻　六名	吉岡(与)、吉岡(由)、宮下、三戸、金田(寅)、間澤
藤井組　九名	藤井、吉田、宮森、宮下(豊)、宮下(哲)、海沼、長谷川、松田、川島
佐々木組　二名	青木、佐々木
中田組　十名	

以上七隻　三十八名

注・調査結果別紙の通り

資料二

操業者名簿解説

高澤組 六人　二隻	南　甚一郎 岡崎　清助 杉ノ森	新町 本町 浜町	高澤　武雄 宮嶋　守三郎 有田　久松	仲町 浜町 新町
鈴木組 五人　二隻	鈴木　伝吾 相原　重治 田村　庄平	新町 弁天町 浜町	高澤　貞雄 有田　留三郎	船場町 弁天町
吉岡組 六人　二隻	吉岡　綱雄 宮下　定治 金田　寅之助	横町 横町 船場町	吉岡　由太郎 三戸　俊夫 間澤　亀吉	横町 横町 横町
栄井組 九人 無動力　磯船九隻	藤井　市郎 宮森　要三郎 宮下　哲男 長谷川　甚三郎 川島　長作	弁天町 弁天町 船場町 横町 横町	吉田　忠太 宮下　豊吉 海沼　仁太郎 松田　末造	弁天町 横町 弁天町 弁天町
佐々木組 二人　一隻	青木　留松	親船町	佐々木　一郎	横町
中田組 十人 無動力　磯船十隻	中田　秀雄 渡辺　東助 清水　常次郎 下澤　市太郎 山下　義一	来札 来札 来札 来札 来札	赤田　常次郎 鍋谷　清一 山根　茂樹 坂上　石太郎 大津　留吉	来札 来札 来札 来札 来札

以上七隻　三十八名

資料三

小型手繰網漁具一ヶ統当り単価表　　昭和二〇年九月

科目	数量	呼称	単価		金額		備考
荒手網	二六	間	一	一二九	二九	三五	綿網二〇当手八号四寸目百掛
袖網	二五	間		九三五	二三	三七	綿網二〇当手六号二寸目
胴網	二四	間		九三五	二二	四四	綿網二〇当手六号二寸目
嚢網	一〆二〇〇	匁	二〇 一三	〇〇 四五	三三	四五	綿糸一五号、二十号各六〇〇匁 二寸五分目網手製賃を含む
浮子綱	三〇	間		一〇	三	〇〇	一等マニラロープ
沈子綱	三〇	間		一〇	七三	〇〇	一等マニラロープ
曳網	一一	丸	四七 六〇 九〇	七〇 一五 二二	七四四	五八	一等五分三丸、六分四丸、七分四丸
浮子	二八	個	一	九六	五	四八	硝子玉　三寸五分
沈子	一八〇	個		二五 三五	五	三〇	瀬戸　一〇匁　一〇〇ケ 三〇匁　八〇ケ
結糸	一 三〇〇	玉 匁	四 一	〇二 一三	七	四一	マニラトワイン一・五匁　一玉 綿糸八号
仕立賃	一式		一五〇	〇〇	一五〇	〇〇	

注・丸＝商品としてのロープは一定の長さに巻かれている。普通は一巻二百メートルでこれを一丸という。例えば五百メートルのロープを使用することを二丸半位使っているという。

玉＝ひとかたまり。

資料四

創業開始（昭和二〇年五月上旬）就航時船　七隻就航

就航船名	トン数	エンジン馬力	所有者氏名	住所
昇龍丸	九トン	二一・八三馬力	吉岡　与平	石狩郡石狩町字横町
第十六甚栄丸				
第十八甚栄丸				
扇松丸	一〇トン	二五馬力	鈴木　伝吾	石狩郡石狩町字新町
萬歳丸	一〇・三六トン	二五馬力	忠海　多平	石狩郡石狩町字横町
南丸	五・七トン	一三・六〇馬力	南　甚一郎	石狩郡石狩町字新町

資料五

昭和九年二月十四日

石狩町漁業組合長　金田　寅之助

石狩支廳長　中井　正楷殿

漁業現況調査ニ関スル件

一月二十九日石商第二六號ヲ以テ本件御照會ニ基キ左記調査ヲ遂ケ及報告候也

左記

一、　定置特別漁業調査　（省略）

二、　許可漁業調査　（省略）

三、　自由漁業調査

市町村名	漁業名称	経営者名	漁船及沖乗人員				使用漁具及数名称人員	漁獲高		価格
			無動力船		動力船			名称	数量	
			隻数	人員	隻数	人員				
石狩町	手	二〇名	二〇	三〇	一	一	小手繰網一流	鰈及雑魚	二，〇〇〇貫	一，〇〇〇円

資料五ノ一

小手繰網漁業者一覧　昭和九年六月

漁業者名	住所	漁業者名	住所
川嶋　長作	横町北二十四	吉田　忠太	弁天町
金子　茂三郎	横町北二十二	眞田　円次郎	弁天町二番地
近　徳三郎	横町	佐々木　市郎	横町
宮下　仁三郎	横町	高橋　健蔵	横町
長谷川　甚三郎	横町北十七	有田　久治	横町南十番地
阿部　軍平	横町	岡崎　清助	横町
藤井　市郎	弁天町	星　小三郎	弁天町北二十二
松田　末蔵	弁天町	宮下　次郎作	弁天町北十三
海沼　仁太郎	横町	小端　六太郎	横町
高橋　虎一	弁天町	宮下　定吉	横町

計　二十名

いしかり暦　第十六号

平成十五年三月二十五日　印刷
平成十五年三月二十八日　発行
発行者　石狩市郷土研究会